

環境問題バザールの実際

バザールの開催

「読書紹介バザール」と同様に、クラスを2班に分けて2回行いました。クラス30人で1回につき話し手（お店）が15人、聞き手（お客）が15人です。2回行うことで話し手も聞き手も経験することができるようにしました。

「スタンプラリーカード」を見ると、一人の生徒が11から14のお店をまわることができたことがわかります。したがって、一人につき10回以上は、繰り返し発表を行うことができたということです。これが、バザール方式のねらいでもあります。

また、今回の相互評価の観点を、次のように設定しました。

- 説明された環境問題と発表者の考えがわかったか。

お店をまわった感想・メッセージ

スタンプラリーカードには、お店をまわった感想・メッセージの欄を設けました。そこには、以下のような記述があります。

- 1回目よりも2回目の発表の方がよくなっているのではないかと思った。全体的にみんな発表のときに自分の言葉でまとめていたので聞く方もわかりやすかった。
- 図や絵を使って説明したりしていたところが多く、とても分かりやすかった。また、むずかしい言葉なども意味を教えてくれ、初めて知ったことがたくさんあった。
- 発表するときに工夫していた人は、クイズ、資料の選択、問いかけなど、とても分かりやすく、おもしろく理解できた。資料をそのまま読むのではなく、要点をまとめていて、内容がしっかりしていてよく理解することができた。
- 絵や図・写真を見せながらの説明やたくさんの資料を使う説明は内容が濃く、分かりやすかった。資料をそのまま読むだけでなく、工夫している人もいて、とても聞きやすかった。

繰り返し学習としてのバザール方式

生徒は、お互いに、どのように発表すれば分かりやすくできるのか、理解することができたものと思われまふ。自分で発表しているときには、なかなか気づくことはできませんが、お客さんの立場で発表を聞くことで、多くのことに気づくことができたことが分かります。

ここから、話すだけでなく聞く学習もできていたと言えます。よい話し手になるには、まずは、よい聞き手にならないといけないことが分かった学習でした。読書紹介バザールに引き続き、環境問題バザールを行ったことで、読書紹介バザールの反省が生かされ、「今度はこうしたい」という思いが、環境問題バザールに反映されていました。

2回にわたるバザール方式の学習により、一人につき、少なくとも20回以上は、繰り返し人前で発表することができました。こういった機会は、従来の学習では、なかなか実現できなかったのではないのでしょうか。話すこと・聞くことの繰り返し学習としての効果は十分に表れていました。